

BSE国内対策（SRM範囲の見直し）に係る食品健康影響評価 ハザードの特性評価において検討すべき事項

▶ 牛群における非定型BSEの発生状況（発生頻度）：

- ・ H-BSEとL-BSEの症例の殆どが8歳以上と高齢であること、及び有病率が明らかに低いことは、非定型BSEが孤発性に発生している可能性が示唆。
- ・ 過去10年間（2014～2023年）のリスク動物及び健康と畜牛に対する時系列分析の結果、2つの非定型BSEについては有意な傾向は認められない。
- ・ 日本での非定型BSE発生はL-BSEが2頭
- ・ 日本における2歳齢以上の牛100万頭当たりの非定型BSEの発生頻度は、年当たりL-BSEは0.07頭。（2016年8月評価時点）

▶ 非定型BSEにおけるDRGの感染価、寄与割合：

※マウス接種試験による感染価のデータが限られていることから、RT-Quick法による感染価の推定結果も含む

- ・ 中枢神経組織に比較した場合、L-BSEは1/10,000（L-BSE）、H-BSEは1/100,000低い。
- ・ RT-QuIC法によるDRG（頸部及び腰部）の推定プリオン力価は、脳幹に比較してH-BSE及びL-BSEでおおよそ1/10低い。

（定型BSEの場合）

- ・ 中枢神経系に比較して約1/10～1/30低い（Arnold, 2009）
- ・ BSE臨床例の総感染負荷に占めるDRGの割合は0.4%未満（EFSA, 2011）

▶ 非定型BSEと人のプリオン病との関連性：**これまでに確認されていない**

▶ ヒトモデルへの感染性：

接種経路	対象動物	H-BSE	L-BSE
脳内	ヒト化Tgマウス（PrP自然レベル）	－	+ / －
	ヒト化Tgマウス（PrP過発現）	－	+ / －
	ネズミキツネザル	NA	+
	カニクイザル	－	+
経口	ネズミキツネザル	NA	+
	カニクイザル	－	－ *

* ECDCが開催したワークショップ内で報告されたのみの事例あり

- ▶ 種間バリア：ヒト化Tgマウス及びウシ化Tgマウスに非定型BSEを脳内接種した結果から、反すう動物と人との間には伝達障壁が存在するとされている。
- ▶ 用量反応：人における知見はこれまでに確認されておらず、どの程度PrP^{Sc}を摂取した場合にプリオン病を発症するかといった閾値は不明。